

---

# Last Shooting

アザゼル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Last Shooting

### 【Zマーク】

Z8554G

### 【作者名】

アザゼル

### 【あらすじ】

とある世界のある場所…世界は廃れ、滅びようとしていた…そんな世界と俺と相棒のちっぽけで刹那の物語。

(前書き)

戦争モノのバッジ等ハンドモノなんでお嫌いな方は「」注意ください

少し昔話をしようと思つ。

世界が戦争なんてバカをやり始めだしてしばらくたつた頃だつた。

戦争をすれば当然人が死ぬ

そうやつて戦える大人が居なくなつたらどうなるか……

この時、暢気に『戦争が終わる』なんて考えた人間は戦場を知らないお偉いさんかはたまた戦争を知らない子供に違いない

残念ながら世界はそんなに単純には出来ちゃいない

そうなれば答えは簡単だ。

『大人』が居なくなつたのなら『子供』を使えば良いだけのことだ  
…簡単だろ？

そんな時だつた俺と相棒が出会つたのは…

相棒はついこないだまで高校生とかいうのをやつてたらしい。

そんな弱つちくてここに来るまで虫も殺せなかつた人間の相棒にも世間の風は容赦なく襲いかかつた。

悲しきかな世界の過ちつてやつに付き合わされるハメになつたつて訳だ。

だが、人つてものは恐ろしく順応性が高く一ヶ月も過ぎてしまえば虫も殺せなかつた純粋な少年なんてものはキレイさっぱり消え去つていた。

相棒も無事汚れた大人の仲間入りを果たす事が出来たつて事だな。

そうして数ヶ月が過ぎたある日のことだ。

その日はバケツをひっくり返したかのような勢いで雨の降る鬱陶しい日だつた気がする。

相棒はいつものように廃墟になつたマンションの一室で息を殺しひたすらに獲物がかかるのを待つていた。

こんな時相棒は決まつて独り言の様に同じ事を口にするのだった  
『何で俺たちはここまで生き残つてこれたのだろうな』ってな

確かに何で俺たちなんだろうとは俺も思つ。

腕のいい奴だつたら俺たちの他にも山のよつにいたし、生きたいと足搔いていた奴だつて山のよつにいた。

だけどそういう奴に限つて真つ先に死んでいくのだった。

『因果な人生だよな…』相棒のその言葉に俺も心から同意しておく  
そうしてそんな事を話す内に日も暮れ出し、今日は珍しく獲物がか  
からなかつたな…

なんて思つていたその時…

俺たちのいる部屋のドアが突然開きそこから人が入つて来たのだつた…

それはまだあどけなさが残る子供だった…

それこそ、ここにいる相棒なんかよりも2～3歳年下の少女。

もちろんその少女が俺たちの味方な訳がなく、動搖していた相棒に反射的に手元の凶器の引き金を引いたのだった…

それは多分彼女の意思ではなく、本能的な自己防衛の為だったのだろ？。

引き金を引いた手は寒くもないのにガタガタと震え、瞳には涙が溜まり頬へと流れ落ちていた。

そうして相棒を撃った後、その少女は相棒の安否も確認せずに逃げるよつに消えて行つた…

彼女は始めて人を撃つたのだろうと俺は思った。

まあ今の俺たちにとって関係ないことだらう

それに俺は相棒に一つ聞きたいことがあつた…

それは「なぜあの少女に撃たれる前に撃ち返さなかつたのか」だ。いくら不意を突かれたとはいえ相手は見た所軍人でもないただの少女だ。

反撃をする隙ぐらい充分にあつたはずだがそれを相棒はしなかつた…

俺にはそれがどうしても疑問に残つたのだった。

そんな俺の言葉を聞いた相棒は『さつきの女の子が妹に見えた』と

笑いながら抜かしやがった。

俺は「つまんね」理由で死ねなよシスコン野郎」とだけ言つておいた…

相棒は『全くだな…あはは』とのんきに笑っていた…

そんな様子を見た俺もなんだか笑いが込み上げてきて氣付くと一人で笑い合つていた…

その様はまさに異常の一言で簡単に片付くやつだった。

しばらく笑い合つていた俺たちだがその笑い声がぱつたり聞こえなくなつた後、不意に『俺、やつぱり死ぬかな…』と相棒が口を開き、聞いてきたのだった…

その顔には口には決して出してはいないものの死の恐怖が滲み出ていた。

俺は戸惑いがあつたが正直に「死ぬだろつな…多分」と真実を告げたのだった…

何せ相棒は体に数ヶ所に穴が空いているのだ。

ここがもつとまともな場所で今すぐ治療にとりかかっていれば助かつていたのかも知れない…

が、こんな戦場に医者がいるはずもなければ治療するのに充分な設備も当然ない…

つまり、助かる確率は万に一つもないところだった…

一瞬で楽に死にきれず命が少しづつ磨り減つていく絶望感と耐えようのない苦痛を感じながら相棒の生は着々と終わりへと向かっていくのだろう。

その前例を俺たちは多く見てきた  
それも多くの仲間で…

俺のその言葉を聞いた相棒は『そりだよな…』と声を漏らした…

その声には何か決意のような、覚悟のようなものが宿つていて何うに俺には聞こえたそう思つた刹那。

相棒は血まみれの手で俺を握りしめ、最後の力を振り絞り自分の頭に添えたのだった…

そして…

相棒はそのまま俺の引き金を引いたのだった  
何人もの人間を殺してきた引き金を…

俺は命令されるまま弾丸を放つた。

目標物は本来撃つべき敵ではなく自分の親友…

『じゃあな

おんぼろな旧式銃だつたけどお前と一緒にいれてまあまあ楽しかつたぜ』

そんな相棒の声が聞こえたような気がした…

相棒が死んだ後、俺はひたすら暇をしていた。

そりあ そうだろう、何せ使い手のいない兵器なんてただの鉄の塊に  
しか過ぎないのだから…

ここで相棒と共に朽ち果てる…

それも悪くないな…なんて思つてたんだぜ

あんたが現れるまではな

なああんた突然だが俺を拾っちゃあくれね～か??

.....

何故かつて??

何言つてるやがるそれはあんたが一番良く分かつてのはずだぜ

だつてそ удар

あんたにだつて多少なりとも責任つてのがあるんだぜ

何せあんたは俺の相棒をこんな脱け殻にしちまつた原因を作つた張  
本人じやね～か

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8554g/>

---

Last Shooting

2011年1月14日14時39分発行